

はじめに

先生――。

日本の至る所で日常的に耳にする言葉です。小中高校の教諭はもちろん、医者、弁護士、政治家、作家など、様々な職業の人々が「先生」と呼ばれています。どれだけ多くの人が、何気ない気持ちで「先生」と口にかけていることでしょうか。「先生」と呼ばれる人達も、特に疑問を持たずに違和感なくその言葉を受け入れています。むしろ、「先生」と呼ばれなければ、不快だと思う方もいるかもしれません。

しかし、「先生」という言葉をよく吟味してみると、その裏にはとても危険な思想が隠されていることに気がきます。というのも、「先生」と発した時点で、互いの立場が明確になるからです。

先生というのは、本来、「先に生まれた人」を意味します。そこには先に生まれた人が偉いという考えが根本にあります。そして、いつの間にか、先生は生まれに関係なく、職業や地位なども含み、「偉い」か「偉くないか」という視点から差別する言葉となったのです。

医者や弁護士、政治家などは、自分達の職業が、他の職業よりも格が上だと思いがちです。場合によっては、相手に「先生」と呼ばせ、自分の言うことを聞かせようとします。これは、紛れもなく「洗脳」です。

では、先生が偉いという考えは、どこに由来するのでしょうか。それは、儒教です。儒教では「先祖を敬う」思想がとても重要視されています。ですから、先に生まれた人を敬うことが習慣として根付いています。そして、その考えを「偉い」「偉くない」の差別の意識へと昇華させたのが、「論語」なのです。

論語は、古代中国の思想家で、儒教の教祖でもある孔子（紀元前551〜紀元前479）やその弟子達の言行を、孔子の死後に彼の流れをくむ人達がまとめた

記録です。

仏教で言うところの仏典、キリスト教で言うところの聖書に当たるようなもので、儒教を学ぶ上では欠かせない書物です。

「学而第一」「為政第二」「八佾第三」「里仁第四」「公治長第五」「雍也第六」「述而第七」「泰白第八」「子罕第九」「郷党第十」「先進第十一」「顔淵第十二」「子路第十三」「憲問第十四」「衛靈公第十五」「季氏第十六」「陽貨第十七」「微子第十八」「子張第十九」「堯曰第二十」という20編で構成されており、全部で512の短文が収録されています。

論語は中国のみならず、日本でも親しまれています。論語の一節や故事成語などを見聞きする機会は多いですし、編纂されてから2000年以上を経た現在も論語を解説した書籍が数多く刊行されています。修練のために論語を書写したり、座右の銘にしたりする方も大勢いるでしょう。

論語そのものに馴染みのない方でも、小学校の道德の授業や親の教えなどで、知らず知らずのうちに学んでいます。「先生」がまさにそうです。「先生」という

言葉は、幼稚園から使われています。子供達は、自分のクラスの教諭に対して何も疑うことなく「先生」と声に出し、無意識レベルでその本来の意味を植え付けられているのです。

「先生」は、紛れもなく差別を助長する言葉です。そして、それは儒教教育によるものです。日本は名目上、階級制度を否定した憲法を基盤とする法治国家なので、子供達に「先生」と呼ばせるのは本当は違憲です。にもかかわらず、現実には堂々と儒教教育がなされています。

「先生」という言葉は、相手に権威を意識させます。権威ある者に従属させられる洗脳となります。

民主主義では、権威からの脱却が1つのテーマとしてありました。これを世界で最初に成功させたのが、アメリカ合衆国です。イギリスとの戦争を経て独立を果たし、万民の平等が保障された国の憲法を制定したことで、脱権威を実現させたのです。

アメリカ合衆国はその後、奴隷制や先住民の迫害、金融システムにおける人間のランク付けなどで、権威主義へと舞い戻ったところもありますが、建国の精神には確かに権威への反発があり、それは今でも生きています。「先生」の概念を潰し、権威ある者の命令を退けたとも言えます。

もつと言えば、これはイエス・キリストがやろうとしたことです。キリストは、権威は神にしかないと言いました。人間は皆平等であり、権威などない、と。しかし、結果としてはこのキリストの願いが叶うことはありませんでした。キリストの死後400年が経ち、ローマ帝国がキリスト教を国教として採用したことで、人間であるキリスト教の聖職者に絶大な権威が生まれ、教皇を頂点としたランク付けのシステムが成立してしまっただけです。

釈迦もそうです。釈迦は全ての者を平等として扱いましたが、後の仏教徒の一部には差別のシステムを築き上げた者もいます。

アメリカ合衆国以外の国では、まだ権威からの脱却はなされていません。先進国でも成功したのは、アメリカ合衆国ぐらいです。ヨーロッパを始め、世界には

未だに君主の存続する国がたくさんあります。ただ、アメリカ合衆国が権威から脱却していると言っても、それは建国時に限定されています。それでも、他国に比べると、建国の精神はまだ生きています。国家のレベルでは未だに戦争という大罪を犯してはいますが、国民は平等の精神を重んじています。それは、権威からの脱却、差別の根絶という文化が埋め込まれているからです。

差別の思想は、人間が元来持っている性質の1つです。人間だけではありません。群れをなす全ての生物に当てはまります。ボスとその他に差別され、時には争いすら起こります。これは、生物が持つ生き残るための本能です。

本能を超えて、差別思想を根絶するのは、並大抵のことではありません。キリストや釈迦ほどの知恵と勇気が必要なかもしれません。しかも、それほどの知恵や勇気を以てしても、数百年も経てば、いつの間にか奴隷と差別のシステムへとすり替わってしまいます。

では、孔子はどうなのでしょう。「論語」を生み出し、儒教をアジア全体に

まで広げた希代の教祖は、キリストや釈迦と同じように権威に抗い、差別を否定していたのでしょうか。

実は、孔子はキリストや釈迦と違って、始めから差別思想を支持していません。そして、権威中心の「支配の論理」を採用していたのです。

子曰 學而時習之 不亦説乎 有朋自遠方來 不亦樂乎 人不知而不慍 不亦君子乎

子曰く、学びて時に之を習う。亦説ばしからずや。朋有り遠方自り來たる。亦た樂しからずや。人知らずして慍みず。亦君子ならずや、と。

(学而第一の一)

これは、論語でも有名な冒頭の言葉です。皆さんも一度は耳にしたことがあるのではないのでしょうか。

言葉の意味は次の通り。

「知識を学び、常にそれを実践に移す。何と楽しいことか。また、友人が遠くから訪ねてくれる。これも何と楽しいことか。人に認められなかったとしても少しも気に掛けない。これが本当の君子ではないだろうか」

なかなか「ためになる」言葉……と思った方は、もう一度よく読んでみてください。本当にためになる言葉でしょうか。

確かに、「学びて時に之を習う」や「朋有り遠方自り來たる」は、その通りかもしれません。しかし、よくよく考えてみれば、当たり前の話です。改めて言われるまでもないでしょう。

私が素直に頷けないのは、最後の節。

「人知らずして慍みず。亦君子ならずや、と」

そのまま現代語訳にすると「人に認められなかったとしても少しも気に掛けない

い。これが本当の君子ではないだろうか」ですが、この裏を返せば「目立つな」という意味に受け取れます。精一杯勉学に励み、目立たないようにすることは美德だと説いているわけです。

どうですか。ちょっとおかしいとは思いませんか。

どうして目立つことが悪いのでしょうか。目立っていても学ぶ人は学びます。学ぶことと目立つことは関係ありません。むしろ、学んで目立ったほうが、人生としては豊かに過ごせるのではないのでしょうか。

論語は、日本人にとってはとても身近な書物です。中には、論語を生きる指針として大切にしている人もいます。実際、論語を学べば、「心豊かな人生を送ることができる」と思っている方も多いのではないのでしょうか。

しかし、この解説からおわかりの通り、官僚にはいいかもしれませんが、私の本音では未来ある若者には勧めたくない生き方です。

論語が私達を輝かしい未来へと導くことはないでしょう。むしろ、逆です。読み方次第で論語は私達の人生を見誤らせる危険な書とさえ言えます。論語を通じ

て感じることは、孔子は人々に奴隷になることを奨励するため、自分の教えを広めたのではないかということなのです。

「そこまで言うほど……」と戸惑われた方は、もう一度先ほどの文をよく読んでみてください。

一見すると、誰もが受け入れやすいことが書かれています。吟味してみると、その裏側にはとんでもない真意が隠されています。

ここで子（＝孔子）が本当に言いたいことは、「目立つな」ということです。

「目立つな」というのは、「成り上がってはいけない」ということ。もつと言え、**「一生小役人でいなさい」「奴隷でいなさい」ということです。**せつかく何かを学んでも、それを最大限に活かそうとせず（例えば、**起業しない**）、一役人として知識を埋もれさせるように促しているのです。現在でも「出る杭は打たれる」の喩え通り、何らかの分野で成功して目立った人が叩かれる風潮があります。

本来、人は身につけた知識を活かして、成長します。そして、新しい世界へ飛び出していくことが、また人を成長させます。

しかし、孔子はそれをよしとはしていません。なぜなら、奴隷が成長したり、奴隷が自分自身の考えを持ち、夢を持って羽ばたいていたりすると困るからです。日本を含むいわゆる儒教国では、それが今でも一般的な風潮として蔓延^{はびこ}っています。

論語の本質的な役割は「権力者が民衆を支配できるように洗脳する」ことです。皇帝などの権力者が、民衆をひと所に縛り付けて奴隷にするために利用した、洗脳書とさえ言えるのです。

前半に誰もが受け入れやすい文言を入れておき、後半に本当に言いたいことを入れるのは、論語の1つの定型ですが、これは厳しく言えばカルトの教義にありがちな手法です。「世界平和」や「潤いのある人生を送るために」といった文の後に、多少怪しい文言を挟んでも、読む人はすんなりと受け入れてしまいます。

論語にはそうした「支配の論理」が随所に散見されます。ですから、論語を鵜呑みにするのは、大変危険と言えるのです。

残念ながら、現在の日本は、論語による「支配の論理」に洗脳されています。

数千年の時をかけて埋め込まれた思想は、今や日本人の遺伝子レベルにまで浸透しています。その結果、日本人は無意識のうちに「支配の論理」に縛られた判断を余儀なくされています。

そこで、私は日本を「脱洗脳」するために、あえて論語を取り上げることになりました。というのも、論語は「権力者のために用いる洗脳書」ではありませんが、だからこそ「洗脳されないため」に活用することができます。

そのためには、まずは「先生」という言葉を使うのをやめなければいけません。権威を疑い、覆さなければいけません。

仮に、あなたが学校あるいはお稽古事で「先生」の立場であり、生徒に「先生」ではなく「うさん」と呼ばれたことに少しでも違和感があれば、論語によって洗脳済みだと自覚してください。国会議員でも、弁護士でも、会計士でも、医師でも同じです。

人間は必ず何かに洗脳されています。親、教師、友人、マスメディアなど、何

者かに洗脳され、束縛されて生きています。そして、日本にとって最も大きな束縛の1つが「論語」なのです。

本当に心豊かな人生を送りたいのであれば、論語による束縛から解放されなければいけません。そして、論語だけではなく、あらゆるものからも脱洗脳し、一度、本当の自由を獲得しなければなりません。

論語は、そのためのテキストとしては、とても多くの示唆に富んでいます。

本書では、孔子が残した言葉を私が再解釈することで、論語からの脱洗脳を試みています。

本書を読めば、論語による「支配の論理」から解放されるだけでなく、あらゆる束縛が見えるようになります。何が「表」で何が「裏」かが、わかるようになります。私達を取り囲む、全ての「仕掛け」が見えるようになります。

皆さんが、より豊かで楽しい人生を謳歌できるために、苦米地式「論語」を是非とも学んでいただければ、と思っています。

[著者プロフィール]

苦米地英人 (とまべち・ひでと)

脳機能学者、計算言語学者、分析哲学者、認知心理学者、カーネギーメロン大学博士 (Ph.D.)、同CyKab兼任フェロー、株式会社ドクター苦米地ワークス代表、コグニティブリサーチラボ株式会社CEO、株式会社角川春樹事務所顧問、中国南開大学客座教授、全日本気功師会副会長、アメリカ公益法人The Better World Foundation日本代表、天台宗ハワイ別院国際部長、財団法人日本催眠術協会代表理事、TPIインターナショナル日本代表。

1959年東京生まれ。上智大学外国語学部英語学科(言語学専攻)卒業後、三菱地所へ入社。2年間の勤務を経て、1985年にフルブライト留学生としてイェール大学大学院に留学。その後、1988年にコンピューター科学の分野で世界最高峰と呼ばれるカーネギーメロン大学大学院哲学計算言語学専攻博士課程に転入。内部表現の認知モデルと計算手法に関する博士論文を提出し、全米で4人目、日本人としては初の計算言語学の博士号を取得。在学中に、世界で最初の音声通訳システムを開発してCNNで紹介されたほか、マッキントッシュの日本語入力ソフト「ことえり」など多くのソフトを開発する。同大学計算機科学科研究員などを務めたのち帰国。徳島大学助教授、ジャストシステム基礎研究所所長、同ピッツバーグ研究所取締役、通商産業省(現経済産業省)情報処理振興審議会専門委員などを歴任。

また、オウム事件では脱洗脳のエキスパートとして信者の脱洗脳や捜査に貢献。現在も各国政府の依頼で、軍や政府関係者がテロリストらに洗脳されることを防ぐ訓練プログラムを開発・指導している。

近年は、次世代P2P型通信・放送システム「KeyHoleTV」の開発・無料公開や、自己啓発や能力開発の分野における世界的権威ルー・タイス氏とともに、能力開発プログラム「PX2」「TPIE」の普及に努めるなど、精力的に活動している。著書に「幻想と覚醒」「ツキを引き寄せる洗脳術」「すごいリーダーは「脳」がちがう」「洗脳」「洗脳護身術」(以上三オプックス)、「グレインサイズの高め方」(フォレスト出版)、「気を整えて夢をかなえるリセット整理術」(永岡書店)、「超瞑想法」(PHP研究所)など多数。

[ドクター苦米地ブログ] <http://www.tomabechi.jp/>

[Twitter] <http://www.twitter.com/DrTomabechi>

[Facebook] <http://facebook.com/drtomabechi>